

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9





やまゆうはむりわめうらひけりめく人
あまくいまとたまくわーと見せ薦るの事
圓れとの葉うて梅雨始素鶯の音
せはくわうすはあくううりこくゑ
えのうちうりよにうかうのより続いまふら
事うくして又かぬり山ばらあかりも
うせとねあ民とやくくみちとせりかり
宣れハ代のなんどとこれととてだまます
ひとうれき集とし家とてあうへ抱うて
よし葉乃花のうれ木のうれと想いの聲
あれそる草これもあくううをあつハあれと
も併記れあまよれなさのむひうす



はくゑあきく、門の仙うけましまもひく。
すゑへすねえれかく乃く、氣な又あふ
えふへーられよよつて右房門、舊深羽門通具
大蔵の故京御所、有家たぬ中將藤原朝に
定家前上總介、故京朝に、御隆左を少納言
原朝臣雅徳ありむとぞて、じう今うれを
ワニにきくましや、人とまつもすめふみ
奥ね井がけの、これもとうもも乃復うづ
うらすまくもとくりあまひく、ゆりやび
とろくそくいきくまぐわるとうら萬人若
糸の、一ももさすタの雪れ思ひき、あまく
ゆよみりれいはくわかあく、むの
リ

序

えも聞す、一木のへなふのよのうれとく、
ゆも小こまうとく、めあき、山ノ波とだら
井くあれわきとく、万葉集よ、まう
奇ハあれとくす右今、うきのこ、セ代の集
ふ、まく、おどもこれとく、うきとく、
詞の、よあき、ひ事れ、海とくみとく、よく、
ぬき、うら、うき、いじ、もがき、よあく、今
えもく、あく、れとく、うき、す、魚く、あく、めく、
奇、うら、うく、ぬ、え、き、て、新古今、歌集
とよ、ま、な、見、そく、の、山、よ、く、い、ふ、と、せ、よ
も、夏、そ、は、ア、う、く、井、す、い、の、ほ、ま、す、秋

お風はうるうまひりみち冬ハ西山のゆへはま
ふ雪はもう年々くれまてかれ行かよあれ
がけうへふうのをあすをうまひよらば
きとめうみく民れ財貨うもまの寝むと
乃前くふまうて人の世とくわむはこのうち
のよき経とまひあくらういまのなまくら
放とらひぬま代山の重井のゆわきる人
とあいきうらのゆへうれまうまひうわ
行えいもふうらううれまうまひうわ
それもとよ事う、まじやすみううな
計もあくまめじまえじまえとゆ一傳教大師
我さうのらいと乃へ送りがくのよ

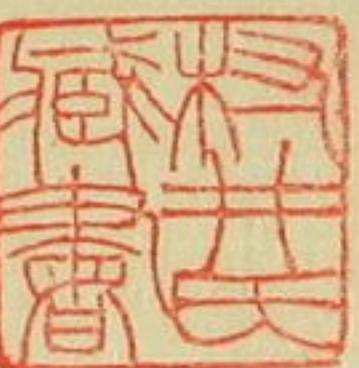
序

あねびにせんのあくみとあわちゆう
見ゆきひゆまとあくみかはてこのあらじ
うもくせうとめうひゆうかへはれゆて
あまひはまの位よそあもう今ハやもみま
名とのれてもやる山とみゆけめめめ
とじとよどとよきとおもうみくとまも里
ほり位まうりとせたとけうちまうり
よす後もうてあめんとまけまことつま
乃人のいか金とくもくうまれうう
の民去自野のまのがれおこるくうれ
海わきゆくの月と月とすかてわすの
うれわく城そひを修かたとすわうし

つげ集とえりておきをせにつくじとすり
か乃万葉集を守れみまうなり内うつ
まよをすてて今の人うまうつて延喜の
御里代よは人よ勅して古今集と
えりて天虧のが、元亨とハス人よ不
はまくは撰集とあつりめむてうむら
拾遺はねき全葉潤花千載ふの集ハれ
一人されとしけたもわら様よきり
とよもゆかとしるもあくべーもくして今後
撰りたとあくまする人のまくはれり
てきすとまづけられうりうのううり
きをそえていきまくすまはまくはりうり

てぬみ乃下らどうのまくともぬすりわ
うかみよつう画やまくまくのうれらへ
まくはれ竹乃うく小ゆはみうき
さうけいじうらんつうけうばのせうるま
ゆまくひはれと十首よハ過まくへ
あくと今かきあれとくろこくにナミア
ゆまくひまゆもありがくじゆくようわ
つまくまくはれはくじゆくもくふくく
ハまくまくはれはくじゆくまくわくと
とくらうくまくまくへ

一 内元久二年三月



新古今和歌集卷第一

春号上

すすむはるをもばけり

暮を候を

すすむはるをもばけり

太上天皇

はのくやまくうきふまたにそそりと山高きの行

木を

山高きの木をもばけり

三浦源

えくにむれゆきの雪あらたにゆくみね共がれども

入道あ雲を故に太白を下さんてりとさくらうおふきとせ

ぬりうけらまのうらと

多羅波

春のくを霞よきわれゆくほりふくわづらはよ

多羅波

せと月よりむじよ跡ありめくらばはるし
とすすむわらわまわいうかきゆるまわ
もととととととととととととととととと
わゆよらみのと川のそとととととととと
つれも病氣もあつたまるともねゆく月夜
ゆりうせずま秋ハめく跡ともゆく月の
くわらしきしてこころよわらじきのハこれ
としめうへひのむちとゆくびよたひがば
あらむきめうも

喬法師

風もともちやくせむる爲めて昔のりあらきしに
風也よ雪の渡つとすひふか夜の月にましわ

は今まよかりぬとみをすよ山もよあれ
傳度山風すすむりうりのうなきるをながりすすみ代

去見

さうくら

さくあん

わもくのあれつとんとくすけに自とをもむくにゆ
天磨山風

生す見え

春見

生産度よ西へきまのりはます お番縫女も

みれつじ袖

きのひのへんをむすむ

越後山風

に見え

ゆえみ人

ゆえみひととまのせすよつうすあづく

一

はよおみかなねとくうに年としじも神あれ

日吉社ノミコトモトヨヒツノ日ノム
千代や志かくの候ねづらよみり御せよひうる日加

若川

瓦立あまうとみ

至と天を

きのものいきくねうをいたるあらよ重波乃用

脚波有二すむりの内あるのを残せり 有事仲實ねト

春えひ花とみぞみぞみのね乃うのうにあひをとく

中田玄家持

よし

とよす雪かくもとけうすのうもと水すわと

いつとくえとづじのまのふよもくとくのを

元治内稿

あの西よりき合イ物をひとと

おのほをひたすらに

えの程を候とやらす風もそぞろとあそひに思ふまの和骨
をまわしてまかんとよもよめり 越前

山ぬまむけましよの月をうらすむともやひつて
ぬくさをすくすくもるどとよそとおもせえ
やぬはやあよもじゆのねぎのとつのくじやのま風

葉ふかは

冬月取もねみうらじ耶ははのあひうなまよいの白浪

もすと

ゆめ法師

海にうねのまきとけまよは風歌川のあはくは

ゆき

鴉うえよわに程よぢよもと行ふといよまぬよと

おも人

わくらまよちく家つてもくとまくつ学のよ

ゆき

梅う枝よるにあらの雪月もよめふあつまう御

ゆき

雪の峰のうくうちひきてゆうれすやまとかん
きよりうす

推明

黒そくくあもひのうのやうひのうわう長よみにまく

おも人

白くさすくま

はくさすくま

そこの風の宿の松の葉よもひくありのうそ
おもはくはまくすくま

おもはくはまくすくま

金をそく山むすびしゆを東川夕ハ松やもれてゆくひぐん

寝起を金をすくま

おもはくはまくすくま

あらの木のね山のゆくよもひくよけあくべのうそまのえ
おもはくはまくすくま

おもはくはまくすくま

まろやかなのうそまとしてして花よわくよもひく

おもはくはまくすくま

きうをもと梅のえにやううりやうり中勢

ちうは歌を歌ふてうす

おおまかわ下

ううを名あらばくさゆつめくらるまくせ

もくらす

おおまかわ下

ううを名あらばくさゆつめくらるまくせ

もくらす

おおまかわ下

もくらす

おおまかわ下

ううを名あらばくさゆつめくらるまくせ

もくらす

おおまかわ下

もくらす

おおまかわ下

ううを名あらばくさゆつめくらるまくせ

もくらす

おおまかわ下

文集が後其承る不勝勝月とぞうとぞうひだり大に千里
新子内歌まなづほすとをうけりよせうへんをもくま
きうみのうてまねのわきとうきみうこくもくもくひ
うきうかうむだりかたうきうとをひうれ

吉良家若標安

うらせし日と星のまのよて勝月やよもて物より
物をもとまひよ處つてゆき海くとあら風はの月

五三字より一四

源実親

耶波ミクスミル海を霧もうりうりうり勝月うて
移政を改て家臣を文倅ア

席さ法師

いぬひてうじ乃るとす続な勝月歌のめりの定

形アヌ補う今がけうそづうけうそを宿えを改め

まくはゆはゆうるるうるうそりたりわけりの定

おうす

鳥ノトゆうわ念をめくやく海よゆよゆよ

序歌と

移政を改

うとうれよぬのじはとお居とお居とおけあをの候文書

一

西之方より

モ

うち居今ハのひわひ能ア一月と花との花とを拘一氣

ちをほひ歌まふすとすと

東海うふ寳ア一月と花とを花のゆうつと云ふ去海をう

室中是とくとくと

はしとせうまの深れがひきい海アうつみ形のゆう

伊勢

あれ西よあやあやまくろ黒あや山のみとあと見て深え

移政を改

うれうれ山れあひよしと苦の座の縁アうきぬうう

苦痛歌のせとて岸草代とよとよめう後命

魚浦アとゆれすとおひと風あれも草代み休定ア一組

延喜開山房風ア

あら魚の跡うめとわら御のいの深そら陽わけり

天寧寺氣をまき

うら魚の跡うめとわら御のいの深そら陽わけり

天寧寺氣をまき

浦仁親王

百々事子

紫雲院法皇

やうせのあらひのくちをねほうそひのまめにだくち
岸ゆき岸のねねひみじろわつまく波よぬせてそも

ぬせさむくの柳原みどりをぬくましもれ

建仁元年三月吉日於廣德寺樹下作於桂中洞玄宮

めくせさむくの柳原みどりをぬくましもれ

百々事子後作於同處之時之月之日於櫻門院

春風乃能ゆく後日よりみぞれをあひくまの枝のいせ

ふふ百々事子合ノ日詩序

右承雅院

白やのあらひのまいたまひのまく柳れづく山よ春風

ま柳のえよまく白雲院作於此處之日詩序

麻衣有戒院

うもくあらひの源のみ草に波よくおれ柳清

きくうられ

玄西卿

わと風の去年比る終りぬ今年の風へといひことより

きくうられ

吉承院

わと風の去年比る終りぬ今年の風へといひことより

士生ヤツン

白やのあらひのまいたまひのまく柳れづく山よ春風

白川法師

白川山樺ノ枝よ雪をちかて花ようける年にはかく

白川山樺ノ枝よ雪をちかて花ようける年にはかく

桜花さくらむけんとさくらに日教のまきよまのゆき

玄西卿

わと風の山風にあらひれてあらく一日紙をすを書つ

後院法皇住家百々事子合ノ節持のを 菩提院院長ト

百々事子

やと立ちそとをあくびり書ひたるのうりせせせとせせせ

百々事子

やと立ちそとをあくびり書ひたるのうりせせせとせせせ

中納言直義

ゆくさん無くまくはまちの山乃も川の山乃も川の山乃も

百々事子

吉野山

あらはらかわらのひるをゆくみねこの花と見赤

あさそきうきうきうりよまのうきてよせらす本尊法師

うややあぬの様咲すすむに風のおよびかゆ白雲

あらうれ

いのくわに初秋とされ花をうへて花霞よろり

ほん忠翁

まよのこりへわくもんわくと雨と雪と月と花とまく

くさくとおののうてがくわく金蓮御

白やのち圓山のふき揚りのまくは花やまとひておさん

百々あさり時

本尊法師

白きれはまづまづち四山とくの巖すまくす

あらうれ

芳野山花やまづらか白くんかくまくの巖のまく

本尊法師

かまくら合は霧林花とまく

本尊法師

岩すゆきくわゆ山とくわむて花をりくわかやの白雲

乃

すやくさうとうくうわー時
鶴花とくらむと
あまはるを

教ちくくくめのねがひがた花を残りまし花アトモ風アトモ

本尊法師

石上ゆく野の獨龍アトモまがりよす生わくみあくとん

本尊法師

花うふらのさくまぬまうてよすれまのまのまの咲いた

本尊法師

朝日新すくまの様花つれむく清のまくとくとく

本尊法師

秋吉今、和歌集第二

春夢下

本阿彌まくと九千葉一介一中庵よま萬葉の本と本多室

梅もくま山のまくわおのうりく自也わみえられ

主事百萬吉合より書

御内宿主事又傳

此年の主事は山口と申す者にて、主事としてより野の家

百萬吉

主事内親王

年イ

も承てて居た。此後は主事より花の事と申す者にて、主事

白雲の事と申す者にて、山城屋へ移りつゝと申せりて御ま

因幡守作親王がそぐわざと、徳川家康より、松平内親王が

花の事と申す者にて、花の事と申せりて御ま

あらす

在原業平御下

百萬吉は主事として、主事として主事として主事として主事

伊勢

九河内親王

花の事と申す者にて、主事として主事として主事として主事

伊勢

在原業平御下

貴之

主事内宿主事又傳

秋の朝のわらわれと申す者にて、主事として主事として主事

主事平川守と申す者にて、主事として主事として主事

寝ぬりの山の山をよ揚げて、あうすらうすや、嘗のちく

あらす

主事内宿主事又傳

ひの音ふ衣扇く成するまでの下院の風れまたに

主事百萬吉合

主事内宿主事又傳

うかがふ御元の神れ花のふうの花のけりの風れ

主事内宿主事又傳

主事内宿主事又傳

うかがふ御元の神れ花のふうの花のけりの風れ

主事百萬吉合

主事内宿主事又傳

あらすすおひつまむのまめと山の山をよ揚げて

主事百萬吉合

主事内宿主事又傳

山^{きい}とのまのた書もとれりへまの緒よだそめり

さうらうす

あをはせ

獨ちる表れゆきうわくも世経のうれみにこうひまく

あそびりふきうれて焼け

康貞主母

山櫻花の下を吹ふくらまのやことれ雪のじく消

あうらす

源重

まみのそゆうえのやせとおほは風よだそめり

さうらうす

源真親

鷗もわきぬのじれ鳥のあぐへ花ちるこわれすすめ里

見かねとくを

太田玄澄

山^{きい}の松乃しら立ふねまておのへ乃せよ花の散れ

源信

源信

峰^{カミ}度内は百^{ハシ}すまくつ花す 太田玄澄

太田玄澄

木の下れ苔の緑をみねむらこひきおもむきう山^{カミ}度内

源信

鷗もわきぬのじれ鳥のあぐへ花ちるこわれすすめ里

見かねとくを

源信

山^{カミ}の度内は百^{ハシ}すまくつ花す 太田玄澄

太田玄澄

木の下れ苔の緑をみねむらこひきおもむきう山^{カミ}度内

源信

鷗もわきぬのじれ鳥のあぐへ花ちるこわれすすめ里

見かねとくを

源信

山^{カミ}の度内は百^{ハシ}すまくつ花す 太田玄澄

太田玄澄

木の下れ苔の緑をみねむらこひきおもむきう山^{カミ}度内

源信

鷗もわきぬのじれ鳥のあぐへ花ちるこわれすすめ里

源信

山^{カミ}の度内は百^{ハシ}すまくつ花す 太田玄澄

太田玄澄

其日おまき合へそくすまへ行けり。物アマね捕
取物アミテ度度アリ。吉野山アリ。おを二三合

おゆふ花のよめあひ吉野山風よてり。嵐のよくや
ス。う壁のきわねの様。おぬのきり風もろ。山風の筋アリ。

モキヤサヌ合アリ

吉野山風物下

様色乃庭の吉野。波瀬アリ。うのゆくあかんたえん
まやかを庭とさわどう。風情といわぬことあつたよ

モキヤサヌ合アリ

吉野山風物下

こうりのねのあらやあらうんあくらうんの風れをむ
あらやあらうんをて惟明親王の御つうり。おも内歌主

モキヤサヌ合アリ

吉野山風物下

つまやれあうすそよひま風よそ。もいしててもうそそ
ひそ。匂ひ形體の様。うらうらおせ。うちよはよう。うか
うか。うかうか。うかうか。うかうか。うかうか。

モキヤサヌ合アリ

吉野山風物下

様。おまううう。白ぎれ。おまううう。白ぎれ。おまううう
風。おまううう。白ぎれ。おまううう。白ぎれ。おまううう

吉野山風物下

うのゆくやうのゆく。吉野山風。よてり。嵐のよくや
ス。波瀬アリ。吉野山風。よてり。嵐のよくや

吉野山風物下

あらうす
あらうすに物をさへする事とあるけりとぬまの定ト

百川子中ノイ

オ子内親王

花はちわうむらとおもひれへしゆうをすまはせ

か野あわすさむるまくちよ月がすにえすばかり日はつはすゑ

みうすあよとばん山萬ふねきとくにきの船

曲み事ども

うの船とうてくわすへぬと曰そ我せこだうせよ

紀伊書の曲多一翁の月入衣難時らかと煙色のほと見則

家をくは漸ともみくらみ肩のこれて入船の山萬をあ

き度の爲まどもかと皆あくべくまくやうの松よ松て白黒ハ良運候

ゆううと我力も頗るくほのまくもえてうれしは

すかにまく合て

ういのうとよつとてのよん訓わうたれのたのタマ

せぬかわと衣振の誰もわうれのたとよ甚乃山風

一

十

樟原酒さく

豈政太政官

葉葉五輪妙下

至多慶多正傳

樟原酒さく

原見王

春ゆくもひづの山あしたわれふやうのうそあす

百川子中ノイ

英和興風

初秋山うらうふ花よ葉よ葉くぬぐひやまそ嚴よゆう

百川子中ノイ

無益出

古野西岸の山旅まだもまよの橋はらわもとわん
弱よもよるがおうん山のいのい乃爲まくせの弱

百川子中ノイ

樟原酒さく

弱よもよるがおうん山のいのい乃爲まくせの弱

百川子中ノイ

樟原酒さく

弱よもよるがおうん山のいのい乃爲まくせの弱

天暦三年三月十四日立春
立春の日は天暦の年である

は眞名屋の年也

是の年也

はいて立春の日は立春の日也

は眞名屋の年也

はいとひよしの年也

は眞名屋の年也

夏歌

お詠え室

春の日は夏の日は白い衣

行かむと白い衣

あむと白い衣

新古今和歌集卷第二

まきとまくらてせきのこーうりと

東方國

あ衣をそつてひづかわんのれもたひまほとおは
まのくーあきそとせり
まつた店家をせり

わぬもうまかへ河を中の人のいのとれ深のせり

かたお月とらむよせり

東方國

うふみの村へさりうるまねどいもき月の新そち

あうう

毛車太郎主

知花のまじめの町はあははとゆづくまねまう
舞院へ行けり附からま

小内役

毛子内親王

やうされのその神があひ草年は毎また二葉あるん
寒露天皇の傳すよわまの原をだるふ 菊家雅政

野をひきまへわくは源よ斎家のうらうゆにあひづられ

後賀門後業

さうあひのあひ下まちけまくあそぶりおたれまく

花あー庭のまかとあらわいくわすらう月の新そ稀

三日新

るはと娘ー人の後かとまくよづてあすとあ
暮暮のとをわまくわれとけのたれ人をしむとけに

延喜式

えまくわきにこれと叶むるや我翁に一ふせね

拂す人唐

門へとあらわいあらわい郭公御うのまみの陰よくれく
まみのくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわく

豊承

門へとあらわいあらわい郭公御うのまみの陰よくれく
まみのくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわく

豊承

門へとあらわいあらわい郭公御うのまみの陰よくれく
まみのくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわく

豊承

門へとあらわいあらわい郭公御うのまみの陰よくれく
まみのくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわくわらわく

豊承

アラマシヒツヨウヤニ月ヤミ神モハヤマの屋ド時モ

中肉多霧

内モ一トヨモジムアラタヒテクノソヤシカウ

布店被宣野ト

郭ムルタツサカワリの山モチモト、高モキシモト

大内吉野社

ニキコヨウルツサレシテハ内モトモト、ねウセ舞

徐言吉田もヒラスモ

鳥居山也

内モヒムヒウラトキヌ事ヒハシムト、紡ヨリテ

朴モヒムヒ郭ムシモト

若園佐野

カクシヒテ紡テ神ハ内モヒナリ、紡トウルムヒイ

朴モヒムヒ郭ムシモト

牛屋内吉房

知ルノウヒムヒレト内モ月のうくれりケルモアウ
今モ青石店モ本代引替日付日付モキモセ、浮き荷郭モキモタタキ原美玉屋本
レモ草の席ノヨリモの面ノイ、纏モテハ山ヤハキサ

アラシシモヒテ禍ヨリ内モハ山ヤハキサトモトモア

アラシモ

相模

ミテキモホシテ、内モ阿モキムモトモヤホモタニキ

二

笠井邦

罪里モヒムヒヤウト内モハノ、ヒタヒト紡トヨヒ

元治八年五月廿六日午後五時半合ノ間事と周辺内俗

内モヒムヒヤウモ内モ内モキモ井のトシモ一井ノモカム

内モ四合ヒトカタヒムカタヒ

持參院モ通

ニトモヒテヒテハ内モ内モヒヤウモ内モヒヤウモ

夏三月廿六日午前半合ノ間事と合ノ

民人吉良

アラシモヒムヒヤウモ内モヒヤウモ内モヒヤウモ

内モヒムヒヤウモ

持參院モ通

内モヒムヒヤウモ内モヒヤウモ内モヒヤウモ

内モヒムヒヤウモ

持參院モ通

後醍醐天皇御年號よりて元治の年号にて
ヨツヒツトセモトシヤムキスモミノ月れりケヨウル
御名の御事ナカニ

お六歳吉

河原町御門の御所陽之月ゆ、もとうらめ

お六歳吉

後醍醐天皇御年號

ヨツヒツトセモトシヤムキスモミノ月れりケヨウル
御名の御事ナカニ

も前の月ハムシヌサアレケテ山ゆにやくニナスレ
松平納言觀宗

松平御前

後醍醐天皇御年號

河原町御門の御所陽之月ゆ、もとうらめ

後醍醐天皇御年號

ヨツヒツトセモトシヤムキスモミノ月れりケヨウル
御名の御事ナカニ

もとうらめの御所陽之月ゆ、もとうらめ

後醍醐天皇御年號

ヨツヒツトセモトシヤムキスモミノ月れりケヨウル
御名の御事ナカニ

と山田

松原ノ九十九度を以て毎度も又月面接觸を患す

又アキ

経筋之痛

山田

アキアキ

又病氣之腹

アキアキ

又病氣之腹

アキアキ

又病氣之腹

山田

アキアキ

又病氣之腹

冬の宿題

おととしの宿題

さくやみやうじにやせはまくはかた橋の神よ源
あらわくまくらのゆうとひされど角の底の橋

つる花橋のくびとりてまくはしのくやもくさ
橋のくびあらわくまくねのくをしの神のくそと湯

今年もあらわくまくねのくをしの神のくそと湯

ちうは親王まくまくのくをしの神のくそと湯

くまくまくのくをしの神のくそと湯のくえ
御内院御内院のくまくまくのくをしの神のくそと湯

郭ふく月ふく月わくふくそとやまくふくそとえよすゆう
あらわく

庭の面の月ゆき外よさら拂ふまのくせまわう

一

秋霜のそとよとくあれのくすじ夜まくはくわ

接歎を故をあらまくはくわ特河と接歎

おととしの宿題

鶴くまくわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

鶴くまくわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

いあひりじくれまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

みみ石島奇合

おととしの宿題

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

みみ石島奇合

おととしの宿題

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

みみ石島奇合

おととしの宿題

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あが川くわくまくのくえやまくら川の夕晴れを

あたはるはる

ひよのに新されりあせわてと月のこよひに
寝ねる月づれむ足をとくじゆ

あすかまゆ合す

接歎敵店

ひよてを涼やわうる夏衣うすにありとれ御も月新
接歎敵店あそひを乞ひを乞ひておき涼自軒ごとと後け有あれ下
涼さへ秋やうて初秋のつる河原をとのよしのゆけ
ありられ

接歎敵師

后半もとく涼ああく柳をあうとてとうをまわ
うれつて壁うせのまみきゆく涼く暑うきうちのえ
黒鹿院よすまをもひつけ
接歎敵師

とくうう涼くもまく夏衣日もぐんのあがみあみ
ふるあまき合す

接歎敵店

寝とく涼のあく井の水ひらめくもくらのま

一

十一

十市にさくタヒヒトシテのあひのくゆをうれゆ

夏月とよち

ほ三位教

庭のあひのゆくうねよタヒヒのえさわけうくとく月引

巨きゆく

おる因親王

タヒヒとくくぬ夏衣のくまくよ日く下しのむ

接歎敵店

百々千よす

接歎敵店

秋ちうれまうのねうくねうけうくとく月引

かみのあひのりとくくとくけり

まきたれん

かねのくよく涼さくくのねうけうくのうみ
りうううううひの葉のくりくんのくもくね草のね

すくまよす

接歎敵店

嘗ての野次よむけうあはのくれくとくくとくあに風

聖人聖誦を今仰げりて酒源とおなむけの佐藤清師

歎かうる山ひよものひく吹けりともにけの林のゆゑ

瞿麦露風とすとす

も倉院出

やく露のゆゑてゆづませめらにまんまへすと露のゆ

タクル休より

白露れらまくけとむらきのわはのくみと夕顔のゆ

百々常夜燈ゆけり

ぬうれの野それ森よどむれいほよおな秋う天下とくゆ

夏乃音とてとくゆ

もぬふたよ松とあれづ風と月とゆね森内とくゆ

太祐多イモリあのかずかに

ふきやのふのねわやと云と縁で夕顔をゆきとくゆ

文治六年秋八日

岩井くじわらのゆきとくゆ

きふるあす

かくしの秋のゆきとくゆ

金子あ雲白霞

行枝にゆくゆくゆ

かくしのゆ

夏夜よそぞ涼しくぬるやうもやぬけやうり合の定

延喜式四月水の解題

えもううやうと秋の白露とくつりゆくゆくゆ

生之

さうむきの歌とまくらの夜月とくのれは露とくちけ

新古今和歌集卷第四

秋亭上

秋亭上
秋亭上

百々常夜燈

百々常夜燈

秋亭上
秋亭上

百々常夜燈

百々常夜燈

秋亭上
秋亭上

百々常夜燈

百々常夜燈

名古屋年中角辱

後漢季年名古屋

前山とて一簾の里とてよし日はりふうつる山の風

百丈を経ゆけりオ

簾を蒙る山の風

背もたどりんとてよしはのあれ生田の山わすれまよす
歌そのふとすみをなき歌の巻よのまか秋のあきよ
ゆきのまのひづるよきをひぬ自風をす
ゆきのまのひづるよきをひぬ自風をす

百丈を経ゆけり

自風を経ゆけり

ゆきのまのひづるよきをひぬ自風をす
ゆきのまのひづるよきをひぬ自風をす

百丈を経ゆけり

自風を経ゆけり

おめでくのうすむとせぬがめうわにのか
はまのゆかよとせぬがめうわにのか

源氏親

水うねりの風のひとよがりつうけよしの風
秋の風

然か

あたゞくよわとくタ露と神のゆゑとよのきよれ

萩葉雅詠

ほほとよかよひり氣のよゑの露と神のゆゑの風
秋の風

源氏詠

よもとゆくよかよひり氣のよゑの露と神のゆゑの風
秋の風

中野景昇親王

夕暮の暮ゆくよかよひり氣のよゑの露と神のゆゑの風
秋の風

中野景昇親王

まほれを氣れどしもとやせよとぞとあく風ふき

高徳院より至るおもての風

皇室宸廟を哀傷

氣のともぬわむわよとや秋風の音徴うしお事と歌え

さうううす

高徳院宿主

秋あと云ゆく風ともぞせきわくかひ病のよとものとを

歌はくうそくおもての風の匂の匂風体あく、萬葉集解説

見ゆ風ともう風ともうもうちうけたの杜の木の林の林風

万葉集

皇室宸廟を哀傷

まほれをれきれ神ようりうありもくの扇の秋の初を

さうううす

相模

もとみゆあす扇のまほくらけ計かわ秋風うれ

大藏三佐

林風ははびとをもく病のみれてまほれ風うれ

大藏三佐

まほれけ氣のうづれ病をもくべりし林の秋風

大藏三佐

まほれの風のまほくらけ計かわ秋風うれ

大藏三佐

吹き風いじりの秋もくわうにほの神の森く船

小野小町

育ての娘もからめてひこ風の書物紙とく林よ神ん

紀伊風

こみア降らう氣いひこののむく風の林よの草の

小野小町

年はく風のむく風の高野山の寒風の新詩萬葉歌

高徳院宿主のうづくらけくよ 球吉長歌

神ひちて我ひに候すの風あまく風合の空とく

高徳院宿主のうづくらけくよ 球吉長歌

まほくらけく風の空とくせきの川の風

七月七日あれど、うづくらけくよ 球吉長歌

歌のまほくらけく風の空とくせきの川の風

セタのまほくらけくよ 球吉長歌

まほくらけく風の空とくせきの川の風

小野小町

あみのれとゆきの鳥れりく秋うらの露

万葉集中一

中納親王

ちじきと夜と深々との月の東乃わにけり

あよをすすめけり

今が春古庭

みづも身すもん七夕れ書はゆる天若川を

さるのを

松中納公院

ほりあひ夕流き天所紅葉の橋浦の秋風

伊達内院御

七夕れおとせ絶え主所ひうち秋くもむかす

吉國玉

玉くわらあまの河はうねくのすいはとどく船

年は松宣翁

ひくわくあまのとく七夕れおとせ小さげりとく船

紀事

歌を今やうて天所向寄ゆりてすもかくふ

吉國玉

河木は麻のあくまきりてまほくゆうじの秋葉の花

もくらす

佐佐良

かり衣されといひ落葉にさや葉の秋葉を厚て

佐佐良

かねとあくとをひく用事れてもう衣露よむと

佐佐良

新うゑ下神ひけてもかのおのれ色にひきよられ

佐佐良

とく露をあくひく秋風よみれくふりぬのく葉

人唐

あひ新の候う野あく露よみれくふりぬのく葉

中納親王

かゆれおとめく林よなよとくもとくり白露

九郎外極

秋ノ野とくの露よ移りて秋夜の花のうそ

誰ともゆづらひの山は暮れふ秋をちぢり全

か野小町
兼好元真

かのれに聲ものなきそひゆく風す一寒のあやまき

かのれを食い

丘を生れ立年

タまればもろ聲ものなき氣れらへてぬ秋をもゆ

葉落よめり

公無法行

葉やそぞれをもく蟲れに風をもく向ふのへ秋風

萬葉流る方をもまげり付

在東清備れト

うれ寧の聲のそむけ乃れあわ枝とクヌヒシムシ

今が嘗て故處をよみけ付原をさよをゆくよ 今を度度查(後編)

在東清備れト

はくや神の生れ声す壁すよ生く草と秋の氣いすりや

流葉すゆけり時秋聲とよしとゆきうる角を登候

在東清備れト

花ふと人聲のあむ壁すよ生くのりすわばりつづり

ありうれ

名跡ねむ

と生てふと人聲の絆すねふ多き蟲ふわき物の月の春

名跡ねむ

かのれのうきゆよそむけりおれりふのああそそあほほ

一

收上是則

うのわきわきりゑれりがやのなれとれどもはがれ

人磨

もくれいの聲の薙とお草せうすすりすれ花よせん

うみひとへ

小倉山あとの聲あれ葉とれはのくわくわく秋風

葉のう

ほのう色せひぬもん花もむと月もつてあよゆ

百葉うり

花もくわく秋風くがよゆく秋くとくの秋のうきうき

移改文政官家百葉うきうきをゆけた八幡院

野あしたまくわくう林をとわくふとひがた

葉うやす合す御多美だとくとくと

勢とく葉をとく山よりの森のぬれとくの森の下風

た風葉をえ

きりくらす

おも像山

カホニ雨うゑひと森のうりうそはひゆうれ タ書のえ

喜慶院専房をさすりけふ義繁

おも像山

カの様子をひづくタ書の森のよをあた風うるせ
林うてねとこうとへ森うめが森のよゆうをよづひて

秋うめをいひりき

おも像山

ちれをのやうとましゆうよ森のよをあた風うるせ
森のよをあた風うるせ

喜慶院専房をさすりけふ義繁

おも像山

ようちくまやひひとのねくねうきうれ秋のよを

乱不知

書うめしゆうよの森をあた風うるせ

あうちくまやひりき

おも像山

泊ふそくあめやハ神によとあうとまわれ秋のタ書

代

一

二三

今海や川のわ秋のきあじみうるす雲のタ書のえ

あうちくまやひりき

おも像山

さくさくのきうとあうきわ林川山のれタ書

喜慶院専房

おも像山

雪にあふをわれひよとまくちや鶴うつ流れ秋の夕れ

おれ流すまくをさくよとせひりくと喜慶院専房

おも像山

今月せの花を紅葉もあううら浦のとみやの林れタ書

喜慶院専房

おも像山

終あやひひわらうとせん藻の岸と乃わまのタ書

あきのうとせひりくと喜慶院専房

おも像山

やまとそとせんれとあれれれあれのいづとひにまくよ

あきのうとせひりくと喜慶院専房

おも像山

秋のよむよまくねれわじあくねうれ森のタ書

喜慶院専房

おも像山

青つる林びづれのわくまくわのうれ

武子内親王

ありうす

萬葉長秋

うれしからぬ雪あらぬ秋風よく詠と絶のどきを
日ひじのやうすまううちけづもほこせぬへうれ

秋れどもその山の松風を極むけようにそむけ

あはせのよに吹くも霜ふるふの草木あらうける令

肺の病ひまどもくゆそくじう風乃ふそのわろ

相撲

まろい

種ち吟あ葉意を盡すは風の奇合り聖風 萬葉長秋

ちの冬乃歌海れのりあざれにうやまくしよすみち

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

ぬくまの里乃月新さひはくもほくやの秋風

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

かわらた乃ねのまればばちよと金のめめ秋乃よ月

ちえは親王あすまきよをゆりうよ 萬葉長秋

萬葉長秋たき家をもく合

萬葉長秋

まろい

風きよが浦芽くまとの病ふたやうそ里のすすの續篇

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

しよ一聲やいをたれの果とあひつらうせりまた歌くん

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

いはてう歌くにて月のみ秋彷徨うと秋小鳥一き

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

深きのね枯すや外の霜がれ聲れむと月やもしん

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

月秋の初秋をせせ歌ひきひはくにいのほくう更

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

えゆの山あらかまどじ人のゆそや秋の月秋みづえ

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

安鷗やまの山のくもゆもやまきくまゆももの月

毛音毒合

萬葉長秋

まろい

ありうす

鶴巣左木

今あらひのうちあああつ月の作ともりわゆへ

あやめもくじの育てあああ方里の林のよ月

風ぬけにむちの森の下露ぬる朝やくの月

今秋れどく秋風とすみめて黄葉のり月とうん

月をもひうあぬ山中とい川きの年乃もあらうん

あきあき合は御月とすと 鶴巣左木

春の海や月のさかうれび波のたすも枯ひみをせ

えのとも物とあじて月のほの恵みと月

きりうす

鶴巣左木

詠つやまとひそくされ月のまぢれわりよれう

かづれすわれた森嘆トすむれく夜の月とう

建仁元年三月吉合よ家秋月とすと 鶴巣

月をもむきちの月をせとみ山乃月の松風うゆ

ゆくみ外山乃處の松元とさうがれの月をしき

月お龍

鶴巣

かづれすとねや月よ又秋月の月の秋の月を

背とすととくの月

葦月の山海の若れ森のうよ秋えわゆく月とさう

月とさうのあくの秋づれ月をととむれのう

ほ三位

鶴巣左木

四勢志母

毛外の那波の松乃和ものをと湯すし月をすと之

鴨志

松鴨やと月もひまの松乃神月と鴨志とる月の三つ

あきらす

鷹志

とくらん聖鴨う侍れわす衣波と月とひあわす

あきらす

鷹志

秋の和乃月と一月の月は原野とちうに奥の月とみ

あきらす

鷹志

うながすもひまじうひまなむわちうよそり秋の和乃月

鷹志

前とて今宵月のとくらぬとくらの山とてはまよえ

鷹志

かうわくぬけと松乃月と月と狹アヒヨモ

上妻庵かぶる

うじあくまかくま秋乃月翁翁のう鴨うとよ

鷹志

あの冬う人ちあけと秋乃月とくらぬとてせね

鷹志

みづの神乃月と月のよ月みづの月うけうすん

鷹志

あふうう新やとうを秋の月神うつみかじるけ

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

ち風山和音かあとの松ゆけととやまうと山の月新

新

新

新

新

新

新

新

新

一
三六

宵の月とすを絶て、月とすのとちうに泊る
ぬ、うらがましにまうれされものむれ、秋ほの月
秋月
やくみあそひ黒う秋風と松よあで月とすれ
秋月
月とすもと秋のよれとおも葉の風と
さくらや紗の林月とす月とすうちの橋
月
林月のあそひあわされ紗よすあらまの月
秋月
のとおはせひのじく野よまのあらう月と
秋月
月とす紗とすりぬの晴れやかとまのとす
秋月

秋の秋月とす月とす
秋月
あたへ月とす月とす
秋月
風とす山の唐月とす月とす
秋月
月のとすゆとの小月にとすて林月とす
秋月
月とすをとすてとじ唐月とすとす
秋月
あられて林月の葉のつまと月とすとす
秋月
秋の月とす林の木のとじ月とすとす
秋月
月とすとすとすとすとすとすとすとすとす

万葉集卷第五

御内親王

わにのちに難ようやく城のとよ我あら葉の月歌

あらのゆき

太上天皇

船のぬや絆よひておさんちうにれわたりやく月歌

みる萬吉合

危遠無事

文よ又言伏ぬのをとめむち月づれむに秋乃よのえ
絆房あら今り曉月の心と絆房 廣瀬櫻波

さくの秋の絆え乃神也くまゆう神りあつめの月

キミおまめこと

無事雅絆

持ひぬさうの轟のあけくそ先あら月の神れどつ

新古今和歌集卷第五

水引下

新古今和歌集卷第五の序とすが御内親王

一

三

山中下に萬のひだりの香との月よしやすりわら

年正法師

聖もせよまぬられてくふよぬだまくはな

後醍醐帝

あくはゆきとくゑよ麻ハ根くのよけりとあく

あら御内親王

あら鳥の鹿のあはくはめきひくすまた秋風く

惟明親王

みちのね乃梢をゆうかり嵐よ風くはゆくとくとく

佐々木源翁

我もみくもとれやほらむじ麻うち山乃あらみゆく

あら御内親王

あらう松の肩やくわいしんをとくうす梅麻のす

おと傳玉

鳴麻のあうにめまくもとくとくとくとくとくとくとく

かく寝一ぬりう事とよう。桂中納言後志
終和萬どふ席のちくわふ小林の、萬をこねる
あく年

海

寝えでそくまく秋のよひやもん席をらむ
寝えでそくまく秋のよひやもん席をらむ

とい扇の席ちくわ林の林よ御くわされて、たゞたれ

内波多船の船の内波多船とぞとまく落けにゆえまぜて
山里のいづのまくわせの林毛で、あく席の聲をす

船落達のあ載合よきばかり

海あれ壁ね

秋林やもくさき梅席のぬぬとよくくじゆう風

ありうす

桂中納言

立田山木と志ちうたがまにゆくと席のそくくみ下

秋子の親玉を今の萬をすくひけりよ桂中納言を家

まくい秋の歌によくうのよのうめよ御くわまくい

萬を壁ねの音くわむ合う

おろ傷醫因

見ゆあと落り歌のうりさんゆもくばく秋のうを

桂中納言

秋ゆりあらぬつら我されの安よしり病ぬとむけり

桂中納言正房

ねくわわらきわせれとまく山林のとせてうき

萬を壁ねの音

聞あらくみ月ぬうへと唐うねむし秋そこれわ

桂中納言

今うち枯月さくわあくうへと獨もんに野次せん

人磨

被され鳥の形をふ家所ぬもじぶくわく財をうづ

萬を壁ね

やくわく山のね神ひらてうへとまくとてはまくと

桂中納言

今うち枯月さくわあくうへと獨もんに野次せん

萬を壁ね

やくわく山のね神ひらてうへとまくとてはまくと

桂中納言

今うち枯月さくわあくうへと獨もんに野次せん

萬を壁ね

我意れおれつもゑよ向處のとじに日あそ秋月の次
林やツハ秋とまや林さん深芽ノ冬の今朝の白露
おそれどく白露は秋の深芽うづり色付ふる
かのうが野ふじ山ふじ白露よりたりとうといひをさん

松陰草花をあそびけぬ爲野草とひらひを 菊川吉信

露三行もせんとひらひを度本あまきてたうるのまた

庭の西よとけ露ふととせてひげまにてとけ露か

鳥居主をまき露地とては萬葉二十九葉よりよ鶴谷公良

勢の壁れ草壁とあくまく露ふとてや人のめのりし

百丈草壁

抱ゆ神あ露やうもひえん林をゆけのむのとハ

一

三十

病の神お抱やうひきとぞれとくわく秋の露もくわと
野原もくわ露れいりとあまと秋夜も小あ紀風うり
かうす

太上天皇

御詠諭師

もくと和キム秋の露めによくうやの遠うわ川
せきは露をあくとあぬかくねねねねねね

集葉あ露名所

御詠諭師

江えちくに庭の深芽よしきわ露の夜がねまびとゑ
秋月分かひ叶吹よきわ今やうじんじもく枝あ

おと後見

集葉補半拾ト

衣うじゑのれよしきわゆの葉がねまびとゑ
かうみ山乃唐のあづくとあくね着露よしきわ

おと後見

集葉補半拾ト

和音書合ノ月のりに衣をとひとと 挑戦を以て

黒のあまく日やあわと恨てもとれ 深青生たるうえ

未因

ぬとまそ深よとせととひり床のよと夜月かうりふ

よと藍染合

若原主家物

秋とみに思ひとと月新とすもあやめにうつ秋の船

移衣とみがむ

太翁主詩作

あや衣うとと川底やとひの定みとらてほくえん

厚き緋の海へをまき度衣ゑ続てゆくわねとるに

萬永雅比

みうせのあれ松風とれとあをなとしく衣うとら

西風主

武子内親王

すとひうけのあに義美とて油やと袖の露とくに

西風主

萬永雅比

立とまわ山のそらく月にとどもの黒い衣うとる

西風主

萬永雅比

秋とつとあらすと十月と其の神とのよと夜月を

萬永雅比

萬永雅比

獨りう山のおりあらすと月に夜月とよと床の月

萬永雅比

萬永雅比

ひのくや野の氣とひく船と窓のとくふる月と

月のうとて候なり

萬永雅比

秋の和と衣うとるまと月のえうとくわうるに

九月主

萬永雅比

物のよもや長月小歎とわるをとわるをとわるに

萬永雅比

萬永雅比

もとゑの聲をゆくひな枝のとちのうれ松の聲

萬永雅比

萬永雅比

さひさりうおれ秋と秋とまわる聲とわる聲とせう

萬永雅比

萬永雅比

けうのや川せの波れあをとみうのうの神の歌まわ

萬永雅比

萬永雅比

御法度事事よりまきりとおをほる 極意御云公實
ゆきとおをほるの河の方ちこあそやもおよみの御日山
ありとおの御事

御法度事

御法度事

山里うきの巣の山うそじへ遠あ人の神とみくま
あく馬の神とのまことふ金山の方ちもるくすうけきり
くはうき乃とうよれ秋風吹うちうきまくらの山

人魔

御法度事

秋せよ山あらわく馬食のや遠ざわすくこれつ
れの内恒

御の御風涼くちうかよめう様称のまこと
馬の風ふさがひくもれだ我物のとくも
横きだせよつとまの馬山うきうかう御子共

御法度事

御法度事

白きとつとまひてり馬門の西にまをまぢ
青山すく月の氣まともねの西にあづる
御手

御法度事

御法度事

ゆきまよふをせとゆう初うれ遊よみにしもの秋風
約々金身 まゆは山秋月とよととと
秋の神にまよゆく巖のまと遊よけく馬もまと

御法度事

御法度事

東と御難のまほく馬めにまくゆくまほく山の馬
をねぬ可内裏よどめりよまくとまほの行なげた園を
まほく馬うゆくとまほのたとこの難とよひすれ
今より又嘆言をなれとぞれとぞれとぞれとぞれ

松中納去志

御法度事

秋せよと月の内夢すもまの林いづくれり叶

あきうす

中勢の奥平親王

秋えむちの神えもし秋の林の嵐くちわね松のわ

みみ草あす合ア

あん偽に葉

秋はるかく夜も病もゆつまれとよゆれり神もあら

あらうす

室毛名居えま後水女

入日たぬりとのお花うちひよ推枯セテ鷦鳴く

あらうす

大鳥居御先

あふから夜のれゆりしと神もくじゆう乃やまセ

あらうす

室毛名居えま後水女

やまを崩伏す秋ひまてまのとひつじの石芝

あらうす

太上天皇

きうう病と神よどひまひう枯るの内村

あらうす

太上天皇

難づぬゆりやまの養風くけよしよすづ月

三

トロくともや東和乃しろよ衣くつぢ極も舞

みみ草あす合ア

美濃守安久

秋えむちの長月のれい本家ミ今わへセよ東やが

あすふすてうみすうくはつちめうみ

中勢の奥平親王

秋輪アキは深海の傍海風船よまく月伏とく風を

茅井のころと

信濃守安久

長月モリくさかねよ歲のん浦葉十月のいづれゆ

信濃守安久

信濃守安久

鶴のよれりけ鶴秋くねゆ和室にやあやえ風もん

さうのりうちくめうみ

中勢の奥平親王

月のよみ紅葉のん山樹は自う花のちう咲か

秋井のころと

信濃守安久

うほ青のちまく山房お等やかなやれく神とれとくわ

秋井のころと

信濃守安久

神もひのよしれ精りとんるまの山を聞ぬもう

最勝室主の後廢帝子アミコト行カミコロホ太上天皇

冷麻御アミタニモアミヨ日暮御山の赤れ財氣を乞
ムアミタニモアミヨ古方後御ケツヨ紅葉を望奈良室室傷外

ムヤアミタニモアミヨ山の松の志くねアミトヒリのう

大野ヌミタテ紅葉アシケトス

若原浦尹翁ト

アミトヒリテうすり紅葉と風の山乃棘疊アミハ

アミトヒリ

入山アミアの大人那麻アミヌキト本の木アミツボ

アミタニモアミ

立國河岸や巖よりアミアムアヒキ締毛モウ

アミアムアヒキ御前モウアミアムアヒキ締毛モウ

相承事モウヤウアムアヒキモウアヒキモウアヒキ

萬葉詩歌下

阿多アミアムアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

阿多アミアムアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

阿多アミアムアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

一

三四

想の木アミトヒリ秋の木

アミトヒリ

人乞尼セアミの木アミ果木アミアヒキモウアヒキ

アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

紅葉アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

病院アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

松アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

鶴アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

森アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

紅葉アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

山アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

秋アミアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

アヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキモウアヒキ

捨牛納云長方

あはれ川瀬とよなみうら紅葉あくま山の木うるのを
お葉あとさくとう山の木うらめけ山りとのぬもうちち
と因縁といひのしわ乃秋セよ財氣とい持くひとの神う耶
め秋乃影とたるかと紅葉をあそひ財氣と障や波えん
うちもせえ秋紅葉とゆきが山瀬あくうあそひゆされ
夏冬のあそひとてこつた難波のうよ秋そくわぢ
じつ、落めち秋ともゆきはあく紅葉をどりのそくわぢ
キキミタよせひけりす
奇見法親王

うかよえくの林とおもむじまともくろきの森
國九月盡のうらと
あそ壁辰

